

平成二十六年七月一日発行（毎月一回1日発行）通巻八九四号

# 火星

平成二十六年七月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

椎の葉の森の仕掛けのごと降り

靴先に実梅まろび来他郷かな

鯉跳ねし音の無頼や早梅雨

ホルモンの煙が麦星搔き消しぬ

昼酒やきのふ御祓の川見えて

山祇の風にあふりし蓮見舟

甲冑の眼窩に見られ汗ばめる

夕立のあとの草ぐさ名をもてる

外灯のふいに点りし墓

蟻蠓の毬弾まざり弛まざり

# 太白星

頬白の一羽きてをり日向の木  
養老の山より吹かれきし桜  
石段を数へて登る桜かな  
弁天と昆沙門在す春の闇  
山ざくら鯉沈みゐる水暗し  
松切つて赤き年輪日永なる  
受け口のオレンジウータン桜散る

杉浦典子

浜口高子

夕映えへもえがらの舞ふ末黒かな  
虫出しや菜箸紐につながる  
くちびるを薄く鳴きけり恋の猫  
落ちつかぬ朧や掘削工事中  
砲口にかまきりの子があをあと  
そこここに笹の風おと夜焚舟  
花びらを唇に受けチンパンジー

# 火星作品

山尾玉藻選

熊笹の丈にありたるさくら冷八幡大山文子

蓬摘母のおいどに躑ぎぬたり

初つばめ給食室に人の影

箒目のそこより流れすみれ草

行く春の弁財天の唇のいろ

めらめらと桜の咲いて三日ほど  
神戸深澤鱻

息掛けて風聞く指や桜守

花筵西行庵へ寄せにけり

紫雲英田の真なか安酒こぼしあひ

振舞ひや八十八夜の水遣ひ

義太夫の扇子膝打つ花の冷  
宝塚山田美恵子

鳥雲に仏らにある戦傷

寝ねにゆく鹿の足並朧月

花の雨巫女がま白き紙折れる  
フレアーが芝にまあるし立子の忌  
御開帳道をよごさぬほどの雨  
老鹿の芽吹き風の目つむれる  
子を連れて笠掛けにゆく花菜風  
話逸れてよりネーブルのよく匂ふ  
わたくしを消し蜂の巣の下通る  
読了や白木蓮のきはだてる  
十まりも数へればよし落椿  
野遊や土の息吹が臍あたり  
野遊の夕づきし泥跳びにけり  
鳥打帽のあたり雲雀のさわがしき  
合格や八方からの雪つぶて  
遠足の子に真つ白な鹿の尻  
老鹿の伏目顔なり春の鐘  
ひとひらの花に目つむる孕鹿  
耕の土の角なりすぐ乾く

宝塚蘭定かず子

八幡坂口夫佐子

大和郡山城 孝子

# 選のあとに 山尾 玉藻

熊笹の丈にありたるさくら冷 大山 文字

桜が咲く頃は思いがけなく薄ら寒い日が戻ってくるものがあるが、それを桜とは全く異質の植物「熊笹」に感受している所が斬新である。硬質感ある「熊笹」を介して足許から伝わる薄ら寒さを巧みに表出し、読み手を十分納得させる。

紫雲英田の真なか安酒こぼしあひ 深澤 鱧

女性陣に誘われて野遊びや摘草に出かけた男性陣が、早々に酒を酌み交わし始めた。紫雲英田の世界に抒情的なものを一切否定するかの如き「安酒」の語が、人間的な一齣を如実に語っている。

花の兩巫女がま白き紙を折り 山田美恵子

巫女溜りで巫女がせつせとなにやら白い紙を折っている。お札か幣になるものだろうか。細やかに動く巫女の美しい指先が想像される。花の雨が降り続き、境内はしっとりとした静寂に包まれているのだろう。

わたくしを消し蜂の巢の下通る 蘭定かず子

蜂の巢の下を通る時は息を詰め音を立てず、蜂に気付かれないようその場から一刻も早く逃れようとするものだ。そんなちよつとした緊張感を要約したような表現の「わたくしを消し」なのだが、「わたくし」の硬派な表現が却って可笑しさを生んでいる。

十まりも数へればよし落椿 坂口夫佐子

はつきりと言い放つ句風はこの作者の作風の特徴の一つと言つてよいだろう。掲句も中七の断定がなかなか小気味よく、しかも読み手を承知させる力がある。

窓ぎはに文机見ゆる花堤 林 範昭

花の堤から何気なく眼下の家を見下ろした作者は、その窓際の文机に目を止めた。暗い家内の誰も座らぬ文机の景に、明るい戸外とは一線を画するような全く別の世界を感じたのだろう。

合格や八方からの雪つぶて 城 孝子

合格子が仲間達から手荒い祝福を受けているのだろう。雪つぶてを打つ声々とその的となつて嬉しい悲鳴を上げる合格子の声が躍如と飛び交う。銀世界の中で喜びが弾け合う一景である。

悪評の聞こえて来たり真桑瓜 白数 康弘

ある所からある人の悪評が耳に入った。そんな只事が「真桑瓜」との取り合わせで俄然愉しさを増幅する。その人物の容貌や風采が真桑瓜にどこか通じているようで愉快ではないか。

牛小屋の辺に辛夷咲く日数かな 大内 和憲

日頃は味気ない牛小屋であるが、横の辛夷が咲きだすと急に春らしい雰囲気に包まれる。小屋内の牛もそんな気配を感じているのかも知れない。しかし作者は、その内花が散つて仕舞うと小屋の景は忽ち元の平凡なものに戻ることをよく承知しているのだ。「日数かな」とは辛夷の花の命を惜しむところが託された措辞。(以下略)



同人 I

# 恒星圈

松井倫子

神鈴の緒の吹かれぬ臍かな  
啄木忌傘に川風受けどほし  
春宵を啄んでゐる陶の鶴  
植木市に鳥居の影の伸びぬたり  
温室に下がる錠前鳥雲に

藤原冬人

松山直美

葉の裏の夜はさびしき柏餅  
矢車のまづ聞こえきし帰郷かな  
川の面の光おだやか著莪の花  
葉桜の昔失くせし腕時計  
ゴマ油で仕上ぐだし巻緑雨かな

目ざめたる鳥に獣に黄砂降る  
なぞへなす堅香子の花戻りたる  
種蒔いて遠嶺耀きぬたりけり  
子の声にさそはれひらくチューリップ  
尖塔のイルミネーション朧なる

堀志皋

村上留美子

対岸の桜ブラックバスのダム  
鶯の声や窓からラジオから  
吾が植ゑし実生桜や色は白  
斑入りなる熊野古道の蝮草  
氷山の如く筍土の中

摘草に染まりし指二日ほど  
町騒の外にただよふ花筏  
母留守の部屋に入れたるリラの風  
春暁や夫の寢床の空つぽに  
寄生木の芽吹きを仰ぐ伏見口

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

昼の湯の老人ばかり花の雨  
鳥の巢を見上げて歩き出しにけり  
海峡に雨降り初むる桜狩  
鳥雲に枕木濡れてゐたりけり

中尾安一

花吹雪声をあげしは人か花か  
一輪の花のごとくに遠桜  
桜折るをみなを見たる朧かな  
花吹雪いつしかみん静かなる

西村節子

ひとひらの離れてゆきし花筏  
しづやかに白杖の立つ桜東風  
川風にかもめ煽らる御開帳  
明王の忿怒に桜ひらきけり

湯谷良

外つ国の人に囲まれ袋角  
みやげ屋の桶の水なむ孕鹿  
花冷や鹿の鼓動を手の平に  
薦茂る珈排店のドアにベル

緒方佳子

錦帯橋の向う囀りこまやかに  
千本の梅の香籠めの寺庇  
東ねある藁のやはらか花山葵  
大甕に枝たつぷりと山桜

林範昭

つかへては時に流るる花の塵  
ふたたびの鯉跳ぬる音夏兆す  
波打ちて茶山の傾ぐ立夏かな  
荒草に声ひそめゐる夏ひばり

井上淳子

先祖祭まづ草餅の配られし  
座布団と湯呑み持ち寄る夕桜  
鼻の効く人と筍掘りにけり  
筍掘り力ぬく時ありにけり